

発達障がいの病態生理に関するDOHaD的研究の進捗

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本DOHaD学会 公開日: 2022-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西村, 倫子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003965

第 10 回日本 DOHaD 学会

<ワークショップ 2>

発達障がい**の**病態生理に関する DOHaD 的研究の進捗

浜松医科大学子どものこころの発達研究センター

西村 倫子

神経発達症（発達障がい）のひとつである自閉スペクトラム症（ASD）の病態には、遺伝的要因が大きく寄与することが知られているが、出生前、周産期、出生後の様々な環境要因の寄与や、遺伝的要因と環境要因の相互作用や相関についても研究が進められている。環境要因について、出生時の父の年齢、母の年齢、母の妊娠高血圧症候群、妊娠前または妊娠中の母の過体重、妊娠中の SSRI の使用といった要因は、子どもの ASD 発症のリスクを高めるというエビデンスが蓄積されているが、これらの環境要因の寄与率は、ASD の表現型と重症度をどのように定義するかによっても異なると言われている。父の年齢と母の年齢はそれぞれ独立したリスクであり、ASD 発症に対するメカニズムは異なると考えられている。父の年齢は男性より女性にとって、母の年齢は女性より男性にとって大きなリスクとなるとも言われているが、先行研究の結果は一致していない。

浜松母と子の出生コホート研究（HBC Study）は、ASD をはじめとする神経発達症の生物学的・心理・社会学的決定因の多面的探索を主な目的のひとつとしている。我々は、自閉症的行動特性を連続的に評価する、対人応答性尺度（SRS-2）を用いて、一般集団における自閉特性を「定型」、「軽度～中等度」、「重度」と定義し、それぞれの群に与える環境要因の影響を男女別に調査した。その結果、女性の重度群においてのみ、父の年齢はリスク因子として特定された（オッズ比 1.15、95%信頼区間: 1.05, 1.25）。この群では、母の年齢は保護的な因子として特定された（オッズ比 0.87、95%信頼区間: 0.75, 0.99）。父の年齢が女性にとって特にリスクとなるという結果は先行研究と一致する。一方母の年齢については、適応行動に対して保護的に働くという先行研究もあり、リスクとしての側面と、保護的な側面との両者が存在すると考えられた。